実際の行動観察に基づく自発的特性推論

○谷口友梨¹・八木保樹²

(¹立命館大学大学院文学研究科・²立命館大学文学部)

キーワード: 特性推論, 行動観察, 再学習パラダイム

Spontaneous trait inferences based on the actual behavior observation

Yuri TANIGUCHI¹, and Yasuki YAGI²

(¹Graduate School of Letters, Ritsumeikan University, ²College of Letters, Ritsumeikan University)

Key words: Trait inference, Behavior observation, Relearning paradigm

目 的

我々は他者の行動からその人物の特性を推論する。この内、顕在的な意図がなく、また無自覚的に対象他者の特性を推論する現象を自発的特性推論 (Spontaneous Trait Inferences; STI) と呼ぶ (Winter & Uleman, 1984)。

今日まで STI を研究するための様々なパラダイムが作成された。これらのパラダイムは、他者の行動を記した記述文を使用する。しかし人々が他者の特性を推論する場合、多くが視覚的な行動の直接的観察に基づく。そこで行為者が実際に行動している場面を視覚的に観察することによっても STI が生じるということを検討する必要がある、これを本研究の目的とした。

今回は測定方法として Carlston & Skowronski (1994) の再学習パラダイムを使用した。このパラダイムは節約効果に基づくものである。まず学習段階で他者の顔写真とその人物の行動を映像で呈示する。次に再学習段階で、学習段階で呈示した他者の顔写真と特性単語の対呈示を行い、その組み合わせを記憶する。最後に再生段階において、再学習段階で各他者の顔写真と対呈示された各特性単語の自由再生を求める。

もし学習段階で他者の行動を観察する際、その人物に対する特性の推論を行っているならば、他者と特性の組み合わせを学習段階と再学習段階において2度学習することになる。したがって学習段階で特性を含意しない行動を呈示した場合と比較して、特性単語の再生率が上昇するという仮説が立ち、これを検証した。

方 法

参加者 大学生 31 名 (男性 10 名, 女性 21 名, 平均年齢 21 歳) であった。この内、実験意図に気付いたり、意図的に対象人物の特性を推論した7名は分析対象から外した。

刺激材料 学習課題は映像刺激を用いた。映像内で呈示した行動は、ポジティブ特性 (まじめ, 几帳面) を含意する2行動, ネガティブ特性 (だらしない, 大ざっぱ) を含意する2行動, 特性を含意しない2行動の計6行動であった。1名の行為者が6行動の1つを行う様子を3分程度録画し、これを6名ぶん作成した。6行動と6名の行為者の組合せから6ブロックを作成し、参加者を無作為に割り当てた

再学習課題では先の映像内の行為者6名を含めた18名の顔写真と特性単語を用いた。映像内でポジティブ行動とネガティブ行動を行った4名の顔写真は、各行動が含意している特性単語との対呈示を行った。特性を含意しない行動を行った2名と映像内に登場しなかった12名の顔写真は、特性単語 (e.g., 積極的, 冷たい) と無作為に組み合わせ、対呈示を行った。

手続き 参加者1名ずつで行った。最初の学習課題では、参加者に6種類の映像を呈示し、各行動を記憶することを求めた。次に3分間の遅延時間を設け、再学習課題を行った。内容は顔写真と単語の組み合わせを記憶するものであった。続いて挿入課題として N-back 課題を行った後、再学習課題で呈示した顔写真を手がかりに、対呈示した単語の自由再生を求めた。学習課

Figure 1 Proportion of correct recall as a function of trait type implied by each behavior.

題, 再学習課題, 単語再生時における刺激は全て無作為な順序で呈示した。

結 果

映像内の行為者の顔写真と対呈示を行った各特性単語に対する回答の正誤判断を2名の評定者が行った。2者間の一致率は87%であり、不一致であった回答は2者間で話し合い、最終判断を下した。正誤判断の結果から、特性タイプ (ポジティブ, ネガティブ, 無特性) ごとに各参加者の2つの行動の再生率を求めた。この再生率に角変換を施し、6 (ブロック) × 3 (特性タイプ) の参加者内分散分析を行った。特性タイプの主効果は有意であった ($F(2,36) = 6.3, p < .01$)。多重比較の結果、行動がポジティブ特性 ($M = .92$) を含意したときの単語の再生率は、特性を含意していないとき ($M = .63$) よりも高かった。ブロックの主効果、および交互作用は有意でなかった (Figure 1)。

考 察

本研究結果は、呈示した行動がポジティブ特性を含意しているとき STI が生じていることを示し、仮説を支持した。したがって視覚的な行動の観察によっても STI が生じるということが示された。

先行研究では、対人認知場面において、行為者と観察者との関係性が、特性の推論過程に影響を与えることが示されている (Idson & Mischel, 2001)。そこで今後の展望として、同様の現象が、顕在的な意図や自覚がない状態においても生じるのかということについて、実際の行動観察場面を用いて検討を行う。

引用文献

- Carlston, D. E., & Skowronski, J. J. (1994). Savings in the relearning of trait information as evidence for spontaneous inference generation. *JPSP*, **66**, 840-856.
- Idson, L. C., & Mischel, W. (2001). The personality of familiar and significant people: The lay perceiver as a social-cognitive theorist. *JPSP*, **80**, 585-596.
- Winter, L., & Uleman, J. S. (1984). When are social judgments made? Evidence for the spontaneous of trait inferences. *JPSP*, **47**, 237-252.